

A black and white photograph showing three men seated at a long, light-colored wooden table. The man on the left is wearing glasses and a striped shirt, looking down at papers on the table. The man in the center is wearing a dark suit and tie, looking slightly to his right. The man on the right is also in a dark suit and tie, looking towards the camera. A microphone stand is positioned in front of the central man. The background shows a plain wall and a cabinet.

たなべ氏は会見で、自民党政権が、外交不在で軍拡ばかり進め、2011年に安保法制＝戦争法が施行されたのち、高松港の軍港化など戦争する国づくりの具体化がなされてきたことを批判。「戦争か平和かの問題で対話によって平和の枠組みをつくるべきだ」とのべました。

たなべ氏は、労働環境の改善や最低賃金を時給

衆院小選挙区香川1区に
たなべ健一氏を擁立



日本共産党香川県委員会は10日、衆院香川1区候補に、たなべ健一（けんいち）氏（43）＝新田辺氏は、日本共産党東部地区委員長で党香川県常任委員。2013年11月の擁立を発表しました。

たなべ氏は会見で、自民党政
治が、外交不在で

総選挙勝利！ 四国キャンペーン開始

の香川の
全小選挙区の候補者3人と
全党で力合わせ、
比例代表選挙をいたかう決意を表明
「四

わんの声をしつかり国政に届ける。国政ひとつなら必ず今の政治を変えていく」と訴え。高松二越前、瓦町駅前に石田おむく候補も参加。

白川氏は「次の総選挙、決してあきらめない。今の政治を変える」とが私たちの【今】なりづく。

の値上がりだ。秋、十月には落ち着くと言われているようだが、暮らし直撃のパンチだ。当然いろいろなものに影響が広がっていそうだ。冬の寒さに財布の口を閉めたままとはいかないから苦戦しそうだ▼昨日の続きが明日、そんなに変化はおこらないよ、というのんびりした時代とは、おさらばしなくてはいけない。不安な時代というか、むしろ不穏な気配が漂いはじめていないか。この秋から冬へは正念場となる▼総選挙が近い。お金をもてあそんでいるような政権党の人々、これまでとは違う選択を、私たち有権者は、その選択肢にきっちりと読み込んで一票一票を投じようではないか。

県が発注した土木工事の一般競争入札で談合を行つていいた疑いがあるとして、公正取引委員会は3日、独禁法違反（不当な取引制限）容疑で、「村上組」（高松市）など建設業者数十社を立ち入り検査しました。関係者へ の取材で分かりました。関係者によると、検査対象は村上組など20社に上り、各社は遅くとも2019年度

から、高松市と直島町で行われた土木工事で受注調整していく疑いがもたれています。落札予定者が予定価格の95%前後で入札。他社は98%以上の価格で入札したり、入札に参加しなかつたりしていたとみられています。県が発注した19~23年度の土木工事総額は約231億円に上り、その大部分で談合疑いがあるといいます。

県発注工事で談合か
公取委が立ち入り検査

※『大和州益田池碑』空海の真筆 国書データベースより

【3面から】「益田惣碑銘并序（ひめいならびにじよ）」には「前堯後禹」とあり、治水を命じた「堯」と、実行した「禹」を顕彰し、この事業をそれになぞらえたりえたものであることがわかります。

日本最古の禹王碑
禹王の遺跡は国内で
133件が認定されて
いますが、多くは水害
常習地域の河川沿いに
治水関連碑として設置
されています。栗林公
園の「大禹謨」は、現
存する日本最古の禹王
碑です。

近代俳句を代表する虚子は、旧松山藩士の家に生まれた。となりが正岡子規の家だった。虚子（本名は清）は、子規が与えた俳号である。一八九五年、肺結核で余命わずかの子規は、虚子に後継者となるよう頼んだが、虚子は辞退した。子規はそれほど虚子の才能を買っていたのである。

松山で発行していた俳句雑誌『ホトトギス』を、東京で発行（一八九八）することにしたのは、虚子である。一部九銭で五百部発行した。『ホトトギス』は現在も発行されており、虚子のひ孫が主宰している。

に発表（一九〇六）され、雑誌の売り上げは激増し、多いときで八千部発行していた。この漱石の大成功に刺激されて、虚子も小説を書くようになった。

一九一〇年八月、日韓併合によつて朝鮮は日本の植民地にされた。その翌年、虚子は四月と六月の二度にわたつて朝鮮を旅行し、長編「朝鮮」を『東京日日新聞』と『大阪毎日新聞』に連載した。この小説は、朝鮮の地を覆いつつあつた植民地社会の絶望的な空氣をとらえている。朝鮮の土を踏んだ虚子は、「衰亡の国民を憐れむ心」がおこり、「何故に他国人に征服されねばならぬのかと舞れに思つた

について」を発表して俳句は文學ではなく單なる趣味に過ぎないと批判した。これに対して強く反発する俳人がいた中で、虚子は、俳句がとうとう第二藝術にまで昇格したのは喜ばしいことだ、と言つて受け入れたのである。

小豆島の苗羽芦の浦にも句碑が建てられている。黒島伝治の文学碑のすぐ横にある。

天高く 雲ゆく方へ
吾もゆく



龜城の句碑



豆島の句碑

貴重な記録となつてゐる。

一九一三年、俳句を再開した虚子は、俳人として理想のために闘う覺悟を宣言した。

春風や　闘志いだきて

卷之三

卷之三